

郷土の英傑 鮭延秀綱物語 11



十一 最上家の隆盛と改易

長谷堂合戦を終えた慶長五(一六〇〇)年秋、鮭延秀綱は五千人の兵を率いて、本庄豊前守満茂と共に、仙北小野寺義道を攻め降伏に導いた。さらに翌年慶長六年、秀綱は、志村伊豆、里見越後等の武将と共に、東善寺城(酒田市)を守り、上杉軍志駄修理を攻め落とし、最上軍念願であった庄内地方を手中に収めた。

この戦いの後、最上義光は五十七万石の大名となり、伊達六十万石と並ぶ東北の雄藩となった。その後慶長十九(一六四四)年、最上義光没までの十数年が、最上家にとって一番輝いた時であった。

「奥羽永慶軍記」には秀綱作の最上家重臣としての存在を堅持する「最上家の掟写し」「最上家出陣の時掟」が掲載されている。

しかし絶頂期にあった最上家に、義光没後急速に暗雲が立ちこめるのである。それは義光の後継者問題に端を発し、重臣たちの対立が表面化した。嫡子義康の暗殺、二代藩主家親の変死、三代藩主家信(義俊)の家督相続に対する重臣たちの不満など問題が続出した。家信擁護派の松根備前が、二代家親毒殺説を幕閣に訴えたことで、「重臣たちは幼主家信を全員で補佐せよ」と論告介入を受けた。

この論告に対して、重臣たちの不満が募り結束を見いだせなかった。ついに幕府は元和八(一六二二)年、最上家改易の沙汰を下した。家信

にはわずか一万石の領地が与えられただけだった。

この時秀綱は、反家信側に立ち、幕府案に従わない意志を持っていたと云われている。あくまで家信を廃嫡し、義光の四男で実力者と云われた山野辺右衛門義忠擁立に動いていたものと思われる。秀綱の思いは叶わず、改易後重臣たちは、他藩にお預けの処分になった。

(真室川町歴史研究会)



最上義光勇戦の像 (山形霞城公園内)

表紙の紹介

第10回

町民レクリエーション大会

10月13日(体育の日)、第10回町民レクリエーション大会が開催され、8種目に約400名の選手が出場しました。表紙の選手宣誓は、ソフトテニスの庄司琴里・井上あゆべア。小学生らしく、すがすがしい選手宣誓を行ってくれました。今回はスポーツ少年団交流会も合同で行い、ファミリーバドミントンとペタンクに出場し、スポーツ間の交流が深められた様子で、各会場(総合運動公園・町民体育館・真室川北部小学校体育館)に賑やかな声が響きわたりました。

